

---

# 東方互換録

咲花木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方互換録

### 【Nコード】

N9028V

### 【作者名】

咲花木

### 【あらすじ】

とある変な青年が幻想入りするお話です

原作は紅魔郷と永夜抄しかプレイしたことないので、おかしな点などがあればご指摘ください

11年8月28日あらすじの文を変更いたしました

申し訳ありません

## プロローグ

ああ

なんで俺なんだろう

俺の何がいけなかったんだろう？

生まれた場所が？

与えられた体が？

見つかった相手が？

……分からない

けど、いつか必ずいいことがある

寧ろ、俺の一生分の不幸が今ここに凝縮されているのだ

だから、ここさえ乗り越えてしまえば、この先は幸福しか残ってない

それでも思わないとこんな場所でやってられない

希望を見出さなければ精神が壊れてしまう

夢を見なければ明日が耐えられない

今日も俺は夢を見て、希望を描いて

実践まじにちを耐え忍ぶ

一話 救われる（前書き）

間違いやおかしいと思う部分がありましたらご指摘ください

9月2日、一部訂正をしました

本当に申し訳ありません

## 一話 救われる

目が覚めたら違う場所にいた。地につく掌からはざらつく砂っぽい平坦な金属の感触ではなく、柔らかい芝と土の感触がする。鼻に突く薬とカビの匂いではなく、心地の良い草木の香りがする。室温調整機から吐き出される息苦しくなるような生温かい風ではなく、自然の新鮮な涼しい風が感じられる。

なんで違う場所なんだ？昨日の夜は確かにあそこにいたはずなんだが……

しかし、どうやら違うのは場所だけのようで、他は同じになっている。いつも通り目には布のようなもので目隠しされて辺りの光景は見る事が出来ない。手足にはずっしりと重みのある金属の枷の感覚があり、少し動くと枷から繋がっている鎖がジャラジャラ音を立てる。しかし俺はもしかすると、と思い腕をあげてみる

「おっ？」

普段なら枷から伸びた鎖は壁に繋がれていて、胸の辺りまでしか上がらない状態なのだが、俺の腕は頭の上まで束縛を受けることなく、ジャラジャラ音を鳴らしながらもすつと上がった

「おお！」

残りの部位同様で、束縛を受けることはなく、立ち上がることもできた。俺は自由になった両手で目隠しに手をかける。しっかりと後ろで固定された目隠しを外すのに、少し時間がかかったが、ようやく解くことができた。そして目隠しを外して辺りを見ようとした。

「つあっ！！目が！！！」

が、久しぶりの光に目が慣れていなく、目の奥に激痛が走る。俺は慌てて目を閉じ、瞼の上から目を押さえる。数秒の間、激痛に悶え苦しんだが、痛みも引いてきたので両手で目を覆いながら薄目で目を慣らし始める。そしてその作業を数分続けた後、もう大丈夫だなと判断し、俺はバツと手を離し、目を開く。

「……綺麗だ」

生き生きとした樹木たちが、青々と広がる空が、爛々と輝く太陽が、見える光景の全てが、ただただ綺麗だった。

「……出れたんだ」

俺の両目から自然と涙があふれ出した。

あれから数十分程泣き続けた。よくもまあ出るものだ。そのおかげか今は大分スカッとした気分だ。

「さて、自由になれたのはいいが、これからどうしよう」

俺は辺りを見渡す。正面 木 右 木 左 木 後ろ 木

……うん、どうやら見渡しても大して意味無いようだな

「ん？」

俺は少し周りに意識を向けてみると、微かな炭と甘い匂いがすることに気が付いた。俺は匂いの元を探ろうとしたが、そこで後ろから声をかけられた。

「ねえそこの変な格好した妖獣」

振り返ると薄紅色の帽子を被ったピンク色の髪の少女が立っていた。しかし、ただの少女ではない。絶対にただの少女な訳がない。これは断言できる。だって彼女の背中から

「羽!？」

紫色の羽が生えているのだから。

「?羽なんて珍しくもないでしょ」

羽の少女は可愛らしくちよこんと首を傾げる。言ってる事は大分ぶっ飛んでる気がするが。少なくとも俺が知ってる人間には羽は生えていない。

「いや、羽生えてる人間なんて初めて見た。ここら辺にはそんな人ばっかりなのか？」



そうだとすると、少なくともここは地球ではない。まあ個人的には、地球じゃないほうが追手とかの心配をしなくて済むからいいんだけど  
「そんなわけないじゃない」

「どうやらここは地球外ではなかったらしい。良かったような良くなかったような……」

「それに私、人間じゃなくて妖怪よ」

「は？」

前言撤回します。やっぱりここは地球外だったようです

「妖怪ってあの河童とか轆轤首ろくろくびとか？」

「ええ。ちなみに私は夜雀の妖怪よ」

なんてこった。俺が知らない内にこの世界は妖怪が跋扈する世界になっていったのか。いや、まさかホントに別の星だったりしないよな  
「ねえ、さつきから貴方なんか変よ」

少女は少し心配そうに言う。だが、俺はそれどころではない

「目の前にいきなり妖怪が現れたんだ。動揺の一つや二つするだろ」  
向こうはこれが普通かも知れないが、こっちにとっては大問題なんだよ

「何言ってるの？そういう貴方も妖怪でしょ？」

「…………… スイマセン。コノヒトナンテイイマシタカ？」

「…………… ちょっと待て。誰が何だって？」

「そうだ。聞き間違えに違いない。俺は生粋 一応人間だ。人間のはずだ。 とは言い切れないが、

「貴方が妖怪って言ったのよ。ホント変な妖獣ね」

目の前の少女は心底呆れたように言い放つ。

「俺が…………… 妖怪？」

「ええ」

「そうか。俺は妖怪になってしまったのか……………」

「ってなんでえ！！！！？」

## 一話 知る（前書き）

いやーなぜか筆がよく進みますねー  
まあ内容は短いですが……

## 二話 知る

あんな大声を出したのは随分と久しぶりだ。そもそも声自体を出したのが久しぶりな気がしないでもないし。そういえば立って歩くということも、二カ月程していなかったな……

「とまあ現実逃避はこのぐらいにして」

「誰に話してるの？」

突然ぶつぶつ呟きだした俺を不審がった少女が、顔を覗き込んでくる

「いやなんでもない。ただの一人言だから気にしないでくれ」

俺はとりあえず現状の確認をしたい。俺の予想はここが別の世界で、あの馬鹿どもになんかされて俺が妖怪になった ってところかな？

「なあ君」

「ミスティア。ミスティア・ローレライよ」

少女 ミスティアは腰に手を当てて、柔らかく笑いながら言う

「ん、すまん。……ミスティア。ここはどこだ？」

俺はミスティアと呼ぶべきか、ローレライと呼ぶべきか迷ったが、ローレライだとなんか噛みそうなので結局ミスティアと呼ぶことにした

「人里から少し離れた森よ」

「んー、そうじゃなくて、国名を教えてください」

「国名？んー、幻想郷に国って括りはあるのかしら？」

「げんそーきよー？」

なんじゃそれ？どこ？聞いたことねえぞ

「まさか貴方、幻想郷も知らなかったの！？」

ミスティアが驚きに目を見開く。

「ああ、気が付いたらここにいたんだ。それ以前はどっかの施設の独房にぶち込まれていた」

「ふーん、なんか大変だったみたいね」

「まあな。んで、そのげんそーきよーってのは、近くになんて国が

あるんだ？」

この情報はできれば欲しい。隣国にあいつらの支部があれば、俺がここにすることがバレル確率が高くなってしまふ。バレたらきつと連れ戻しに来るだろう。まあ、もう二度とごめんだが。

「知らないわ。幻想郷は博麗大結界っていう結界に囲われてるから、私たちは外の世界にできることができないのよ」

「結界……まあよくわかんねえが、それは外からげんそーきょーに入ることも出来ないのか？」

「ええ、基本的にはね」

これは実に耳寄りな情報だ。つまりここにいれば奴らに見つかることは無いということか。やっぱり不幸の後には幸福がついてくるもんだな

「ありがとうミステリア」

「どういたしまして。それと貴方、なんか外来人みたいな妖獣だから、人里の守護者を尋ねてみるといいかもね」

「人里の守護者か。なんかちょっと怖い気もしないでもないが、行ってみるよ」

「人里はこの道を真っ直ぐいったところにあるわ」

ミステリアは俺の後ろを指さし、人里への道のりを教えてくれる。実に優しい子だ。

「何から何まで悪いなミステリア。ホントにありがとう」

俺はミステリアに礼を言い、柵から伸びた鎖をズルズル引きずりながら、教えてもらった道の方へ歩き出す

「あ！そう言えば貴方名前は？」

ミステリアは離れた俺に聞こえるように、大きな声で尋ねる。俺は振り返り、その問いかけに大きな声で返す

「忘れた！」

うん、全く覚えてないだよね。名前

## 二話 知る（後書き）

正直、この時点ではまだ主人公の名前決めてません（笑）

思いつきで書いたせいで、決まっている事がほとんどない状態は、流石にまずいでしょうか？

感想などはいつでもお待ちしていますよー

### 三話 嘆く(前書き)

どうもです。

最近なんか涼しくなりましたね。私は暑いのは苦手なんで非常に嬉しいです。非常に嬉しいです(重要的事情なので二回言いました)

今回はいつもに比べてちょっと長いです。まあ前回と前々回に比べての話ですけど……

### 三話 嘆く

「結局なんだったのかしら、あの妖獣。」

私は一人取り残された森の中で、ぼつりと呟く。

あの妖獣に話しかけたのは本当に気まぐれだった。私が森を散歩している最中にたまたま目に入って、妙な格好をしているから興味本位で声をかけてみたのだ。

「それに最後のなんなのよ」

私は去り際に彼がはなつた言葉を思い出し、思わず笑いがこみあげてくる

「ふふつ、あんな元気よく忘れただなんて。普通自分の名前忘れないでしょ」

私は彼が去っていった鎖の跡が残る道を見て呟く

「また会えるかな」

俺は人里への道を歩きながら、手の枷を外そうと努力していた。具体的に何をしていたかというと、そこらへんで拾ったいい感じの木を、枷の鍵穴に突っ込んでほじくり回していた。

「うん、はつきり言おう。こんなんで開くわけがねえよ」

俺は十分程粘ってみたものの、開く気がまるでしない。まあ当たり前だが

「早く人里つかねえかな」

俺はズルズル引きずる鎖をつつとおしく思いながらも、我慢してどんどん歩を進める。

「お？あれか？」

森が切れた先には木で出来た塀が立ち並び、物見やぐらなども見受

けられた。

「ほお………いつの時代だ？ここは？」

俺の記憶が正しければ、俺のいた時代はこんな感じではなかったよ  
うな気がするぞ

「まあいいや。入口はつと」

俺は塀を沿うように歩き、入口のような門を発見する。ついでに門  
番みたいな人に発見される。

「出たな妖怪！！また人を攫いに来たんだろが、そうはいかない  
ぞ！！」

「いやーあの、そんなつもりはないんですけど……」

「騙されないぞ！！おい！！応援を呼んでくれ！！」

「あのー人の話聞いてます？」

駄目だこの人。全く話し聞いてくれない。

「はあ……俺妖怪じゃないのに」

門番みたいな人は、キツと俺を睨みつけながら槍を向け、一定の距  
離を保ったまま静止している。恐らく援軍を待っているのだろう。

「なあ、人里の守護者って人に用があるんだが。あんた知ってるか  
？」

「慧音さんに何の用だ！！」

「慧音さんって言うんだ。まあいいや、とにかくその人を尋ねてみ  
ろって言われたんで来たんだが、会って話すことは出来ないか？」

「嘘をつくな！そう言って里に入って人を攫う気だろう！」

しかし、話は全く聞き入れてもらえなかった。正直、もう少しぐら  
い考えてくれてもいいんじゃないかと思っただね

「攫わねえって」

「私に用があるのか？その妖獣」

俺はポリポリ頬を掻いていると、里の中から白髪の変な帽子を被っ  
た女性が現れた

「あんたが慧音さんって人か？」

「ああそうだ」



「ここに来る前にあんたを尋ねてみるって言われたんで来たんだが、どうやら俺は歓迎されていないみたいだな」

俺は慧音さんの後ろに控えている、武器を持った男たちに視線をやる  
「つい先日、人里で妖怪が暴れ、何人も人が殺されてな。そのせいで皆殺気立っているんだ」

「成程、タイミングが悪かったのか」

さて、早速目的が無くなってしまったが、この先どうしようかな  
俺はそんなことを思いながらくると踵を返して、人里を後にしようとする。しかし、後ろから慧音さんに声をかけられる

「待て。私に用があるのだろう？里に入らなくても、ここで話ぐらいは聞くことはできるが」

俺はぴたりと足を止めて慧音さんのほうに振り返る。

「……………それもそうだな」

その考えはなかったな。よく見ると慧音さんなんか、頭良さそうな雰囲気するもんな。

「ではまず、私を尋ねると言われたのはなんでだ？」

「なんでって言われても、わかんねえとしか返せねえよ。ここに行くといいよって言われたから来た訳なんだし」

「ふむ。私のところに行くといいと言われたのか？」

「ああ、確かに人里の守護者を尋ねてみるって言われたが」

俺の返答を聞くと慧音さんは口元に指を当て、なにか考え始める。

「誰かが私のところに人を寄こすのは基本的に外来人なんだが、妖獣を寄こされたのは初めてだぞ」

「ん？そついやミステリアも外来人がどうのこうの言ってたな。なあ外来人ってなんなんだ？」

俺はふと思ひ出し、慧音さんに聞いてみる

「外来人というのは、外の世界から何らかの理由で、この幻想郷に入ってきた人たちのことだ。まあ妖獣であるキミには関係ないと思うが」

「あ、じゃあ多分俺もその外来人って奴じゃね？」

ミステリアの話聞く限りじゃ、俺がいたのはその外の世界ってところだ。成程、それでミステリアは俺を慧音さんのところに行くように言ったのか。

「は？キミは何を言ってるんだ？何処からどう見てもキミは妖獣じゃないか」

「いや、俺は人間だ。ん？そういえば今は妖怪なのか？……なあ、俺ホントに妖怪なのか？」

「一体何を……っ！！妖力が無い！？それに霊力があるだろ！？」

慧音さんはなんか知らないけど凄く驚いてるようだ。俺なんかしたか？しかも慧音さんが大声をあげたせいで、後ろの武器持った男たちが凄み効かせて睨んでくるんだが。

「なあ、どうした？いきなり大声出して」

「ああ、すまない。少々驚いてな」

「少々つてレベルじゃなかったような気がするんだが。まあいいや、それでホントにどうしたんだ？」

「簡単に言うと、どうやらキミは人間で間違いないようだ」

「やっぱり俺人間だったんだ。だよな」、妖怪になんてなった記憶なんて微塵もないし。ん？そもそも人間から妖怪になれるのか？

人間が妖怪になるってことは、ただのネズミが某電気ネズミになるみたいなもんか？……なんか違う気もしないでもないが、この際無視だ。

「ん？そもそも俺はなんで妖怪と間違えられていたんだ？人間なのに」

慧音さんは俺の言葉に少し考えた後、こう返した

「正直に言うと、キミの見た目が妖怪にしか見えないんだ」

……なんか、すごい傷ついた。俺って傍から見ると妖怪みたいな顔なのか？でも、外の世界でそんなこと言われたことないしな。ということは、この幻想郷では俺みたいな顔を妖怪顔というのか？だとすると、俺は外の世界に帰りたいな。

「……泣いていいですか？」

「ええ!？」

ガチで泣きそうになっている俺を見て、慧音さんが慌てふためく。なんか幻想郷に来てから、涙脆くなったのかもしれない。

「……すまん。取り乱してしまっただけ」

「いや、私の言い方も悪かったのかもしれない」

慧音さんが申し訳なさそうに謝る。それをなんとか作った笑顔で許す。

「一つ聞きたいんだが、幻想郷に来て自分の姿を見たか？」

「姿?……そっか、見てねえな」

そう言われて俺は自分の体に視線を落とす。あそこで着せられていた、薄汚れた緑色の手術服のようなものを身に纏い、四肢には分厚い金属の枷がはめられていた。そこから30センチ程の長さの鎖が伸び、足の方は地面をズルズル引きずるような形になっている。うん、特に変なところは無い気がするが……

「ん?」

今なんか視界の隅に灰色の物体が入ったような気がする。

俺はその物体を追い、自分の背面を覗き込む。

「は?」

俺の腰から少しらへんの部分から、灰色の毛が生えた太長い物体が突き出ていた。

あれだ、これは俗に言う尻尾というやつだ。しかし、尻尾というものは犬とか猫とか某戦闘民族しか生えていなかったはずだ。なのになんで俺から生えてんだ?

「なにこれ?」

「だから言っただろう。尻尾と獣耳を生やした男なんて、普通妖怪にしか見えないぞ」

ちよつと待て。獣耳だと?

ジャラ (腕をあげた時に鎖が鳴る音)

ガシツ (頭を掴み音)

もふっ (獣耳を掴んだ時の音)

ガクッ（俺が膝をつく音）

心当たりなんてひとつしかない。あの馬鹿野郎どものせいに決まっている

「ぶざけんじゃねえよおお！…！」

### 三話 嘆く(後書き)

相変わらず何も考えていない咲花木です(キリッ

未だに主人公の名前考えてない……

なんかもう名無しでもいいかなあなんて思い始めちゃっています

感想などはいつでもお待ちしていますよ

#### 四話 忘れる(前書き)

どうやったたら妖力とか霊力とか分かるんでしょうかね？

フィーリングですかね？

## 四話 忘れる

「大きな声出してすまなかつたな。」

「いや、私も少し無遠慮だった。すまん」

「気にしないでくれ。それよりも、こんなの付いてるけど、俺ホントに人間なのか？」

俺は尻尾と耳を指さし、慧音さんに問いかける。正直、こんな状態なら「あんた妖怪」って言われても仕方がないと思う。ちなみに周りにいた男たちは、慧音さんが俺を人間だと言ってくれたので、もう里の中に戻っている。

「見た目はともかくとして、キミは人間だ」

「なんで分かるんだ？」

「妖怪や人間といった種族は、内包する力の質で見分けたりすることが出来るんだ。妖怪には妖力、人間には霊力といった具合でな」

「成程、ということは俺の中には霊力っていう力があるということか」

「そういうことだ」

へえ、面白いもんだな。妖力に霊力か……

「なあ、霊力とか妖力ってなんかに使えるのか？」

もし出来るならビームとか撃てたらいいなあ

「体の強化とか霊弾を放つこととか出来るが、なかなか応用が効くから他にも色々な使い道があるぞ」

「ビームとか撃てたりするか!？」

「あっああ……まあ……多分」

マジでか!？俺今、幻想郷来てスゲーよかつたって思ってるよ!

いきなりテンションが上がった俺に戸惑う慧音さん。

だってビームだぜ!テンションあがらないわけないだろ!

「まっまあ、キミには今度霊力の使い方を教えてあげる予定だから、その時に試してみてくれ」

「え？」

「普通の外来人はちゃんと外の世界に帰すんだが、キミは今のままだと帰れないだろう？それに本当にすまないが、その見た目じゃ、暫くは人里で暮らすことは出来ないだろうから、せめてある程度の霊力の使い方だけでも教えようと思ってな」

慧音さん優しすぎじゃね！？

「迷惑、だったか？」

慧音さんは上目遣い気味に（身長的にそうなるのは必然だが）少し心配そうな顔で俺を見る。

正直それは反則だ！めちゃくちゃ可愛いじゃないか！

「いや、そんなことはない！寧ろ感謝したいぐらいだ！」

「よかった！」

慧音さんはほっとしたように胸をなでおろし、柔らかな笑みを浮かべる

「それじゃあ、明日からにでも教えてくれないか？」

「わかった。では明日、またここで会うでしょう」

「了解。じゃあまた明日な」

慧音さんは俺と約束を交わすと、人里の中に戻っていた。

「……守護者って言うくらいだから、もっと怖い人が来るかと思っ  
てたら、綺麗でいい人だったな」

俺は人里の入り口で立ちつくしながら一人呟く。空を見てみると少し赤みがかかっていて、日が傾き始めていた。もうじき夜が来る。俺はそんな朱色の世界で再び呟く。

「俺……………今夜どこに泊ればいいんだ？」

慧音さん……………結構重要なこと忘れてるよ……………





#### 四話 忘れる（後書き）

私個人的にはしっかり者の慧音先生よりも、ちよつとドジっぽいけ  
ーね先生の方が好きですねー

五話 死ぬ（前書き）

なんかサブタイが……

## 五話 死ぬ

さて、本格的にどうしよう。

今はもうすでに夜である。辺りは暗いはずなのだが、なんか知らないけどよく見えるので視界には困らないのだが、ボロボロの手術服では割と肌寒い。もしかしたら慧音さんが戻ってくるかもしれないと思って、門の前で暫く待っていたのが、一向に戻ってくる気配が無いのもう諦めて、これからどうするかを考え始めていた

「なんか夜になると、妖怪とかが活発になるようなイメージがあるんだよな。」

正直いくつか案は出たのだが、どれをとるのが最善か悩んでいた。

1、この辺りで一晩明かす

2、森の中に入ってどこかいい場所を探す

3、ミステイアのところに戻る

4、人里に突撃

の四つでだ。1は外敵に対しては安全ではあるが、このまま冷え込んでいっただら正直マズイ。2、3は言わずもが、妖怪などの外敵が怖い。4はきつとこの先人里にはお世話になるだろうから、出来るだけ避けたい。

「まあ俺も見ただ目妖怪だから平気だろ」

悩んだ末、結局俺は2を選んだ。3でもよかつたんだが、ミステイアもいつまでもあそこにいるわけないだろうし、あんまり世話になつてばかりではいけないと思ったから止めた。

「さて、行きますか」

俺は森の中に入って行った

「寒さを凌げそうなところないかな」

森の中に入った俺は、妖怪に一度も会うことなく案外なんとかなっていた。

俺の選択は間違ってたな！

「あー洞窟とかあればいいんだけどな」

俺はそこらに成っていた林檎みたいな木の実を齧りながら、いいところを散策するがなかなか見つからない。

「にしてもホントに寒いな」

俺は自分を抱くように腕を回し、少しでも暖を取ろうとする。

そういや、今の季節ってどのぐらいなんだろ？こんなに寒いんだから冬か？いや春先でも夜は十分寒いしな。明日にでも慧音さんに聞いてみよう

俺はそんなどうでもいい事を考えながら歩いていると、何か違和感のようなものを感じた

「ん？」

違和感の正体は匂いだった。それも鼻に突く強い匂い。昔何度も嗅いでいた匂い。だが決して慣れることのできなかった匂い。

……血の……匂い

俺はその匂いを嗅いだ瞬間、あのころの事をフラッシュバックのように思い出した。

気持ち悪い……クラクラする……

俺は右手を眩む頭に当て、歯を食いしばって嘔吐感を耐える。しかし、そんな俺の状態など気にすることなく匂いはどんどん近付いてくる

来るんじゃない……どっか行きやがれ……

俺は強くなる一方の匂いにやられ、その場に座り込む。立って離れようにも頭は機能せず、足は言う事を利かない。そしてそれは現れた

木々の隙間から出てきたそれは、俺の身の丈の倍以上ある体軀を持ち、その爪と口元は赤く血で汚れ、瞳は黄色く輝き真っ直ぐ俺を見据えていた。

っ！！

力強く咆哮をあげる。獲物を見つけた喜びの咆哮だろうか？それとも俺に対して牽制の意味を持った咆哮だろうか？

「まあどっちでもいいか」

匂いのせいで感覚が麻痺しているのだろうか、俺はそんな取り乱すことはなかった。

っ！！

それはもう一度咆哮をあげ、それと同時にへたり込んでいる俺に一気に接近してきた。それは予想していたよりも断然速いスピードで、すぐに俺の目の前まで来た。

あーあ。折角外に出れたんだから、もう少しぐらい楽しみたかったな。

俺は少し顔をあげると、俺の脳天目掛けて血まみれの腕を振り降ろそうとしているそれがいた。

……………死にたくねえな

そんな俺の願いは、無情にも血まみれの腕に引き裂かれた

五話 死ぬ（後書き）

主人公名前出る前に死にましたWWW

## 六話 目覚める(前書き)

どうもです。

いやーもう8月も終わりですね。実に早いものです。



## 六話 目覚める

昨日の夜の冷たい風とは打って変わって、今は暖かい日の光が降り注いできている。目を閉じていたら、そんなに眠くもないのに寝入ってしまったそうなくらい心地が良い。ただ残念なのは、辺りから血の匂いがぶんぶんすることだ。正直言ってこの匂いの中、再び寝ることは不可能だろう。

「折角の朝が台無しだ」

俺は少しイラつきながら地面に寝転がっていた体を起こす。

「……………」

俺は言葉を失う。理解が出来なかった。体を起こしたその視線の先には、引き裂かれた真つ赤な死体が一つあった。俺は漸く思い出した。昨日の夜のことを。そして誰に言うでもなく一人呟く

「……………俺なんで生きてんだろ？」

血の近くでは頭がポンコツなるということが判明したので、とりあえず俺はその場から離れた。

「お、池がある」

適当に歩いているとなんか池に出た。俺はラッキーと思いつつ、体に付いた血を洗い流そうと池に近づく。

「誰っ！？　って俺か」

池を覗き込んだ頭には灰色の犬っぽい耳が生えて、最初誰だか分からなかった。しかし、落ち着いて見てみると顔自体は変わっていないので、自分だとすぐに理解した。俺は着るものがこれしかないの  
で、腕や顔などについた血だけを洗い落とす。

えーと、昨日の夜……………

俺は大分マシになってきた頭を回転させ、昨日の夜のことを思い出す

～回想～

……死にたくねえな

そんな俺の願いは、無情にも血まみれの腕に引き裂かれた　　は  
ずだった

「は？」

確かに俺に腕は振り降ろされた。これは確かだ。その凶悪な爪は、俺を頭のとっぺんから足元まで引き裂いた。しかしだ。現状、引き裂かれた俺には傷一つなく、腕を振り降ろしたそれが血を噴き出して倒れた。

「あ………」

そしてそれから噴き出した大量の血を浴びた俺は、強烈な匂いに意識を手放した。

～回想終了～

「こんなもんか？」

俺は血を落とした後、池のほとりに座っていた。そして昨日のことを思い出したと同時にいくつかの疑問も浮かんできた。

んー、なんであの化け物は死んだんだろ？まあ、死因は確実にあの

傷　ん？そついや、あの化け物の傷って、頭から足ぐらいまで伸びた四本の傷だったよな。それってあの時俺が受ける筈だった傷なんじゃねえの？

俺はふとそんなことを思う。俺は確かに引き裂かれた。しかし俺に傷はなく、代わりにあの化け物が、俺の受ける筈だった傷を受けた。もしかしたらあの化け物は、人間を引き裂こうとしたら、自分が引き裂かれてしまう妖怪なのかも　　ってねえな

「あー、誰か教えて　あ」

俺は閃いた。それと同時に思い出した

「今日慧音さんと会ったんだ」

すっかり忘れてた。そうだ、慧音さんで思い出したけど、霊力とか関係あったりするのかな？

「……ってか何時行けばいいんだろ？」

## 六話 目覚める(後書き)

咲花木「第一回 東方互換録座談会」

「ワー!!! / \おー!!! /

名無し「……なにこれ？」

咲「座談会。いや、他の人の小説見ていて、こういうのやってみたいな〜って思ったんですよね〜」

名「まあ座談会は分かったよ。俺が言いたいのは俺の名前だよ! なんだよ名無しって!」

咲「だってまだ本編で名前出てないじゃん」

名「だったらさっさと出せよ!」

咲「まだ考えて………出すタイミングがなくてさ」

名「まだ考えてないって言おうとしたよな! 今絶対に言おうとしたよな!」

咲「違います。まだ思いついてないだけです」

名「変わんねえよ!」

咲「まあ、そんなどうでもいいことは置いておいて」

名「主人公の名前はどうでもいいことなのか!？」

咲「まだ考えていないことをここで言っても仕方ないでしょ？」

名「だったら考えろや!」

咲「気が向いたらね」

名「うおい!」

咲「それでは今回はこのぐらいにします。ではこの小説を読んでくださっている数少ない読者の皆様。次話もよろしくお願いします」

咲・名「「ノシ」」

## 七話 感謝する(前書き)

どうもです。

慧音のターン長いですね。そろそろ他のキャラも出したいんですがね

## 七話 感謝する

慧音さんとの約束を思い出した俺は、とりあえず待ち合わせ場所の人里のあの門へ向かった。しかし、どうやって来たか殆ど覚えていなかったため、ちよくちよく迷子になった。結局、人里に着くまでに大分時間がかかってしまい、早朝に出発したはずなのに、着いたのは日が殆ど真上に昇ってしまっていた。そして人里の門の前には慧音さんが立っていた

「すまない慧音さん。ちよつと迷子になって来るのが遅れた」

俺の声に反応してこちらを向く慧音さん。

「ああ、気にするな　　ってその血はどうした!?!」

そして服についた大量の返り血に動揺する慧音さん。まあ当たり前だが。

「大丈夫大丈夫。俺の血じゃないから」

「いや、そういうことじゃない!昨日何があったんだ!」

慧音さんは息を荒げて俺に詰め寄る。

「いやー、正直俺もよくわかんねえんだけど　　」

俺は昨日の夜あったことを慧音さんに話し、何か分かるかどうか聞いた。話し終わると、慧音さんは口元に指を当てて思考に耽る。俺は慧音さんの言葉を待った

「あくまでも憶測でしかないが、キミにはなんらかの能力があるのかもかもしれない」

「能力?」

能力つてえと、空飛べたり炎とか出せたりするあれか?

「ああ、皆が皆持っているというわけではないが、個々で違った特殊な力のことだ」

「成程、その能力って慧音さんにあるの?」

「一応、『歴史を食べる程度の能力』と『歴史を創る程度の能力』というのを持っている」

「へえ、二つもあるんだ」

『歴史を食べる程度の能力』と『歴史を創る程度の能力』か。どんなことが出来るんだろ？歴史を創るってのは何となく分かる気がするけど、食べるって方は気になるな。

「まあ私は半獣だから、人間の時と人獣の時とで能力がちよっと違うつてただけだな」

「半獣……俺もそうなのかな？」

普通に考えてみると、こんな耳と尻尾生やした奴なんて普通の人間であるはずがない。

「んーどうなんだろう。確かにそうなのかもしれないが、私はどうもそう思えない。上手く言葉にはできないが、私とは全く違うような気がするんだ」

俺って一体なんなんだろうな。あの頃の記憶は殆ど曖昧だし、ずっと目隠しされていたから、何されてるのかも分からなかったし。

「あー！もうヤメだヤメだ！折角来た幸福を辛気臭くしたくねえ！」俺は頭をガシガシ？く。

「悪かったな。この件はもういいや」

「そうか、キミがいいと言うなら私はいいが。それより ほれ」慧音さんは門の前に行き、そこに置いてあつた包みを取って俺に投げる。

「これは？」

「キミの着替えと食事が入ってる。きつと何も食べていないんだろうつと思つてな」

慧音さん……あんだホント良い人やわ……

俺は何か熱いものが込み上げてきたが、ぐつとこらえた。

「……ありがとう」

「気にするな。それにキミには野宿させてしまったし、結局人里内に住まわせてやることも出来なかった。怒られはしても、感謝される立場ではないよ」

慧音さんは本当にすまなそうな顔で俯く。



「顔をあげてくれ。そのことは慧音さんが気にする必要はないし、昨日会ったばかりの赤の他人に、ここまでの事してもらってるってだけで十分過ぎる。だから顔をあげてくれないと俺も困る」  
これは本音だ。せめて倉庫でもいいから、寒さを凌げるところが欲しかったっていうのもあったが、赤の他人に何故ここまでしてくれるの不思議で仕方がない

「……すまないな。ありがとう」

「謝らんでくれ、感謝したいのは俺の方なのに」

俺はそう言って笑うと、慧音さんもそれにつられる様に笑った

俺は茂みに入ってあの血まみれの手術服を脱ぎ捨て、慧音さんから貰った灰色の和服に着替えた後、中に入っていたおにぎりを食べた。ちよつと尻尾が窮屈だったので、穴を開けてそこに尻尾を通した。その時に気付いたのだが、少し意識を通せば尻尾も自在に動くということが判明した。そしておにぎりは美味しかった。うん。実に美味しかった。あそこに入ってから碌な物食べていなかったというのがあるが、とにかく美味しかった

「本当にありがとう。服も動きやすいし、おにぎりも美味しかったし」

「そう言ってくれると用意した甲斐があったよ。それじゃあ、早速だけど霊力の使い方に関して教えようと思うんだが、準備はいいか？」

「勿論」

見た目は殆ど無表情と言っても差し支えの無いような表情であった俺だが、内心かなりわくわくしていた。何せビームが撃てるように

なるのだ。冷静になれと言われても無理な話だ。まあそれが顔に出るか出ないかは話が別だが。

「では、まずは霊力というものは」

## 七話 感謝する（後書き）

霊力の解説などは作者の都合上カットさせていただきました。

## 八話 泊る（前書き）

どうもです。

何気に連日投稿です。まあ一話が短いですから大して負担はないのですが

## 八話 泊る

慧音先生の霊力講座、理論編と実践編は日が傾き始めるまで続いた。それを受け終わった俺は、地面に座りこんで乱れた息を整えていた。

「大丈夫か？」

俺と同じぐらい……いや、俺以上に動いていたはずの慧音さんは、少し息が乱れているだけで、さほど疲労の色は見られなかった。

「ああ……大丈夫だ。」

俺は息が整うと立ち上がり、服に付いた土を払う。

「まあ初めて霊力を使ったんだから疲れて当然だ。あんまり無理するなよ」

「あいよ。だけでももう大丈夫だ」

正直まだ結構きついけど、目の前で平然としている慧音さんを見て、頑張つて虚勢を張ることにした

「そうか？ならいいんだが」

慧音さんはまだ俺を心配そうに見ていたが、俺は気にしない事にした

「しかし、霊力の操作っていうのは難しいな」

俺は今日の講座を振り返ってみる。

今日得た知ったこと

- ・ 霊力とか妖力とかの他に、神力とか魔力っていうのがあるらしい
- ・ 内包している力を見極められるようになった（神力と魔力は分からないが）

- ・ 霊力を使って小さい霊弾を作れるようになった

- ・ 霊力で体をちよつとだけ強化出来るようになった

ぐらいだろう。まあビームはまだ無理だ。はやく撃てるようになりたい。まあ基礎はこれだけなので、あとは自分の応用次第でなんとかなるらしい

「まあ仕方ないさ。しかし、今日一日でよくここまで出来たものだな。キミはなかなかセンスがあるな」

「そうなのか？」

まあセンスがあるって言われるのは嬉しいが、今の現状じゃーあねえ……

「さて、それじゃあ慧音さん、今日は本当にありがとな」

俺はそろそろ日も落ちそうになってきたので、寝床を探しに森に戻ろうとする。

「あーちよつと待ってくれ！」

しかし、そこで慧音さんに呼びとめられた。

「ん？」

なんか忘れてることあつたっけ？

俺は振り返って慧音さんの方を向く。

「今日も野宿するのか？」

「ああ、他に寝るところないしな」

「なら、うちに泊っていかないか？」

………はい？

「昨日は見た目が妖獣だから平気だろうと思っていたが、結果血まみれ。そんなことがあつた中、また野宿させるわけにはいかないだろ？」

「いやいやいや！確かにその心遣いは凄く嬉しいが、俺が慧音さんの家に泊るのは色々と問題があるような気がするぞ！」

「大丈夫だ。耳はその包みの布を頭に巻けばばれないし、尻尾は服に仕舞えば問題ない。それに長くいるわけじゃないから、怪しまれる心配も無い」

「いやそうじゃなくてだな………」

「ん？他に何か問題があつたか？」

慧音さんは首を傾げる。そして真剣に他の問題を探し始める

………駄目だこりゃ

結局、慧音さんの家で一泊させてもらうことになりました



八話 泊る（後書き）

やっぱり書くときは東方聞きながらですね

非常に筆がはかどります



## 九話 潜入する（前書き）

どうもです。

サブタイに関しては気にしないでください。

それとこの話でついに主人公にも名前が……

## 九話 潜入する

HQ、HQ。こちらコードネームNANASHI。人里の潜入は上手くいった。これよりミツシヨンに移る

「なにをやっているんだ？」

「昔、友達に借りたゲームの真似」

きよるきよると忙しく辺りを見ながらぶつぶつ独り言を呟く俺に、慧音さんが話しかける

「……なんというか、思っていたよりもキミは気さくな人のようだな」

「まあ、変わり者とは言われてたな」

俺はあそこに入れられる前の学校生活を思い出す。が、すぐに止める。

思い出す必要なんか欠片もねえな。

「着いたぞ。ここが私の家だ」

俺が少しブルーになっていると、慧音さん宅に着いた。周りの民家よりも少し大きいぐらいで、他はあまり大差ない木造の家だった。

そして戸の横には「上白沢」と書かれた表札がかかっていた。

「……じょうはくさわ？」

「かみしらさわだ」

表札の字を読んだら、慧音さんに訂正された。慧音さんが戸を開け、中に入っていく。俺はその後ろに続き、慧音さんの家に入っていた。

「へえ、慧音さんって上白沢慧音っていうんだ」

「そういえば自己紹介をしていなかったな。改めて、私の名前は上白沢慧音だ。人間とハクタクの半人半獣で、この人里の寺子屋で先生をやってる」

ハクタク……なんか聞いたことあるようなないような……まあいいや。

「へえ、慧音さんって先生なんだ」

「まあ一応な」

慧音さんは囲炉裏のそばに腰かけ帽子を外す。俺は慧音さんと囲炉裏を挟んで向かい合うように座る

「じゃあ、次は俺の番か。えーと、名前は忘れた。多分人間。歳は確か17ぐらい。向こうでは実験動物モルモットやっていた」

「……………は？」

慧音さんがポカンとした顔をした。原因はおそらく、俺の自己紹介が全然紹介になっていないからだろう。だがこれは仕方ないんだ。俺自身も俺の事が分からな過ぎて困っているところなんだから。

「なあ、ふざ「ふざけてるつもりはないぞ」……………本当に名前も覚えてないのか？」

「ああ、綺麗さっぱり忘れた」

えーっと、最後に名乗ったのは何時だったっけ？

「……………なんとというか、本当にキミは変わった人だな」

慧音さんが頭に手をやりながら、呆れたように言う。

そんなに变か？……………名前ねえ

「あ、そうだ。これから名前が無いってのも不便だから、慧音さんが俺の名前考えてくれないか？」

「私がか？」

「ああ、慧音さんなら良い名前くれそうだし」

「むう、分かった。私でいいなら考えるが、あまり期待しないでくれよ」

そう言つと慧音さんは黙り込む。俺の名前を考えているのだろう。

「……………」

「……………」

数分程、沈黙が続いた。そして慧音さんが口を開いた

「すまない、時間も時間だから夕食の準備をしながら考えさせてくれ」

そういつて慧音さんは別の部屋に行ってしまった。俺も手伝うべきかと思つたが、包丁すら碌に握つたことない俺が行つても、慧音さんの邪魔にしかならないと思ひ直し、今日の出来ごとを振り返る。

「いやー、この二日間いろんなことがあつたな。」

なんか知らんけど森に出て、ミステリアに会つて、人里来て、化け物に襲われて、何故か俺生きてて、慧音さんの家に泊めさせてもらつて。あ、そついや能力について聞いてないな。もしホントにあるとしたらどんなのだろ？あの化け物の時を考えると、自分のダメージが無くなつて、相手がそのダメージを受ける的な感じか？

俺は能力について考えていると、頭の中にふつと沸いて出たように一つの文が浮かんできた。

「……これが俺の能力なのか？」

## 九話 潜入する（後書き）

咲花木「第二回 東方互換録座談会」

「わー！！／＼おー！！／

名無し「おい！てめえふざけんじゃねえぞ！なんであそこで出さねえんだよ！」

咲「能力名？あれはあそこで切った方が、個人的に次に繋げやすいから」

名「まあそれもあつたが、ちゃんとした理由があるならそれでいい。だが、俺がい一番言いたいのは名前だ！名前！なんで次回に持ち越しなんだよ！」

咲「名前をあそこで切った理由？そりゃ気分に決まってるじゃないか」

名「じゃああの前書きはなんだつたんだよ！」

咲「だからあれは、主人公にも名前が決まるフラグが立ちます。つてこと」

名「フラグじゃなくていい加減だせよ！」

咲「あー、次に出すよ。つたく出せばいいんでしょ出せば」

名「なんで逆ギレ？」

咲「ノリ」

名「あそ」

咲「それじゃあ、名前の事ばかり弄つてても面白くないので、本編について話しましょうか」

名「だな。それじゃあひとつ聞きたいんだが、俺、謎多くね？」

咲「まー確かに理解できない部分が多々あるけど、半分ぐらいはまあある程度考えてあるから大丈夫」

名「……なんかスゲー心配になつてきた」

咲「気にしたら負け」

名「この先平気なのか？」

咲「一応平気だと思っただけど、なんかズレが生じたら追々訂正していくつもりですね。無いといいんですが、もしあった場合は申し訳ありません」

名「後先考えずに書くからいけねえんだよ」

咲「うつせえ！腐れ名無しゅじんこう！」

名「うまく繋げて罵倒すんじゃねえよ！」

咲「まあ名無しは無視して、それではそろそろ御開きといきましょ

うか。それではこの小説を読んでくださっている数少ない読者の皆様。次回もよろしくお願いします」

咲・名「ノシ」

十話 得る（前書き）

どうもです。

この話を書きながら世界陸上見ました。室伏さんすごいですね



## 十話 得る

暫くすると慧音さんが茶碗や鍋の乗った盆を持って戻ってきた。そして俺の姿を見ると、驚いたように目を見開き、部屋の入り口で停止する。そして数秒後、今度は変なものを見るような目で俺を見て、部屋に入りながら訊ねる

「何してるんだ？」

「んー実験かな？」

俺は慧音さんが入ってきた戸とは違う戸のところで、パントマイムよろしくな動きをしていたのだ。しかも、態々その戸を外して。ちなみにその戸は最初俺が座っていたところにそれが置いてある。

まあそんな目で見られても、仕方ないって言えば仕方ないな。こんなことしてんだもん。ってか慧音さん力強いな。鍋とか結構重そうなのに

「実験？」

慧音さんは盆を近くの机に置く。俺はパントマイムを解除して、戸を手にとり元の位置に戻し始める。

「ああ。さつき、俺の能力ってなんだろうって考えていたら、ふつと浮かんでな。害も無さそうだったから試しに使ってみたら、あんな風になったって訳よ」

「やっぱり能力があったのか。それでどんな能力なんだ？」

「俺の能力は」

あらゆるものを入れ換える程度の能力

なが出来るのはか能力の名前からおおよそ推測できる。昨日の夜はダメージを受ける対象的なものを入れ替えたのだろう。そして、今は俺自身の位置と戸の位置を入れ換えてみたのだ。

「ほお、なかなか面白い能力だな」

慧音さんは盆の上にあった鍋を囲炉裏にかけ、俺に白米の入った茶碗と箸を渡してくれる。

「あ、ありがとう。」

「ふっ気にするな。それでさつきは変なことをしていたのか」

慧音さんはさつき俺の行動を思い出したのか、くすくす笑い始める  
「思い出さんでくれ。正直かなり恥ずかしい」

はあ………なんであんなことをしたんだろ。というか慧音さんが戻ってくるタイミングが良過ぎるだろ。………もしかして狙ってた？

的などうでもいい考えを巡らせていると、慧音さんが話しかけてきたので、その考えを打ち切る。

「そついえばキミの名前がようやく決まったぞ」

「本当か？」

「ああ。なかなか迷ったが、「灰然将<sup>かいぜんしょう</sup>」というのはどうだろう？」

「灰然将。これが俺の名前か。慧音さん、良い名前をありがとう」

「どういたしましてだ。将」

俺が礼を言つと、慧音さんは俺の名前を呼んで答えてくれた。

やっぱ、名前があるっていいものかもな

俺はそんなことを思いながら、慧音さんと一緒に夕食を摂った

誰かと食事をするなんて何年振りだろうか

温かい

嬉しい

楽しい

心の底からそう思っている

思っているはずなのに

心のどこかで

この光景を冷めたような

無感情な目で見つめる俺がいた

十話 得る（後書き）

咲花木「第三回 東方互換録座談会」

「わー！！／＼おー！！／

将「遂に名前が出た！！」

咲「おめー」

将「これでもう名無しとはおさらばだぜ」

咲「そんなに嬉しいのか？」

将「ああ、本編ではあんまり喜んでなかったように見えたけど、結構嬉しいんだぜ」

咲「まあ所詮私の思い付きだけだな」

将「そういうこと言うんじゃないよ！！ってかこの名前つけた理由とか、ちゃんとなんかあるんだろ？」

咲「まああるにはあるけど、敢えて言わない」

将「なんで？」

咲「ノリ」

将「……なんかお前そればっかだよな」

咲「気にすんな」

将「はあ…まあいいや。それよりも最後の謎シリーズ何？」

咲「それもノリだZ E（キリッ）」

将「ホントに馬鹿な作者で申し訳ありません」

咲「ちよっ酷くない？」

将「気にすんな」

咲「…もういいや。それではそろそろお開きといきましょうか。この小説を読んでくださっている数少ない読者の皆様」

咲・将「ノシ」

## 十一話 住まう(前書き)

どうもです。

パソコンが使用不可となったんで携帯で投稿しているのですが、どうにもやりにくいです

9月3日 一部修正をしました

## 十一話 住まう

夕食を戴いたあと慧音さんから二つのことを聞いた。一つ目は幻想郷について。各地にある要所のこと、気をつけた方がいい大妖怪たちのこと、通称弹幕ごっこなど、色々なことを教えてくれた。

弹幕ごっこは一応出来るようにしておいたほうがいいのだが、拳大の大きさの霊弾を作るのに、十秒ぐらいもかかっているのは話にならないだろう。それよりも俺は、とりあえず迷いの竹林には行ってみたい。ぜひとも一回は行ってみたい。え？なんでかって？そりゃ俺の好物が筍だからに決まってるんだろ

まあ今はそんなどうでもいいことは置いておいて、二つ目は慧音さんが俺に住む家を提供してくれたこと。昨日、人里から少し離れた場所にある今は使われていない小屋を発見したらいい。家具も揃っていて、広さもそこそこの中々な物件だ。じゃあなぜ慧音さんは自宅に呼んだのか？それを聞いたら、その小屋は半年程使ってなく、かなり埃被っていたので、かなり大掛かりな掃除が必要だったのだ。そのため、霊力指南で疲れた俺を気遣って泊めてくれたらしい。本当に良い人だ

「すまないな、本当に世話になりっぱなしで」

俺は今、最初入ってきたのとは違う門の前にいる。ここから少し行ったらところにその小屋があるらしい。慧音さんは掃除も手伝うと言ってくれたが、服、霊力指南、夕食、風呂、寝床、朝食、何から何までお世話になりっぱなしの慧音さんに、これ以上迷惑をかけたくなかったため、なんとか納得してもらった。いつか絶対に恩返しをしよう俺は心に決めた

「気にするな。私も楽しかったかな」

慧音さんは微笑みながらそう返す「そう言ってもらえるとありがたい」

俺は慧音さんの微笑みにつられるように笑う

「暫くすれば人里も落ち着いてくるだろうから、必要な物はそこで揃えてくれ」

「分かった。それじゃあ慧音さん。何かから何まで世話になった。ありがとう。じゃあ、また」

「ああ、またな」

俺は慧音さんに手を振りながら人里を後にした。

「お、有った有った」

俺は慧音さんに教えてもらった通りの道を進んでいると、それなり大きさの小屋を発見した。道中、妖怪に襲われたらどうしようなどと心配していたが、どうやら取り越し苦労だったようだ

「半年ぐらい使ってなかったって言ってたけど、見た目は案外きれいだな」

俺は戸の前に立ちこの小屋 もといマイホームを見上げる。そして戸に手をかける

ガラッ

「ッゲホッゲホッ!!」

外装の見た目に安心して、戸を意気揚々と開け放った俺は、中から出てきた埃たちに出迎えられる羽目になった

「ゲホッゲホッ 畜生。完全に油断してたぜ」

俺は噓せかえりながら、未だ埃が舞い続けている戸の方を睨み付ける

「いいぜ、てめえらがその気なら、こっちだって本気で片付けさせてもらうぜ!!」

どうやら俺の中の変なスイッチが入ってしまったようだ。俺は慧音さんから貰った雑巾と箒を構える

「勝負だ!!」



今、埃対俺の壮絶なる戦いの火蓋が切って落とされた

掃除を始めてから数時間後。日もすっかり昇りきり、傾き始めていた時分、俺は埃との戦いに勝利した。

「無駄にテンションあげるんじゃないかな……そのせいでスゲー疲れた」

俺はやつとの思いで綺麗になった家の床に寝そべる。

「とりあえず、これからどうしよう」

明日はまあ行くところ決まってるからいいとして、明日以降が問題なんだよなあ。どうやって生計立ててくか……。なんかこの能力を上手く利用できるような仕事ないか？

「んー、まあ後で考えよ。一先ず森でなんか食い物集めてこよ」

俺は体を起こし立ち上がる。手足についた鎖がジャラジャラと鳴る。かなりうるさい上に邪魔なので取りたいのだが、使われている金属が特殊なため頑張っても取れない。まあ武器としても使えるので、俺は前向きに考えている

「木の実とかあればいいんだけどな」

俺は呑気にぼやきながら家を出ていった

十一話 住まう(後書き)

次話投稿は遅くなるかもしれませんが

感想などいつでもお待ちしております

十二話 歩く(前書き)

どうもです。

いやー台風すごいですね。室内でザーツツという雨音を聞くのが好きなのは、私が引きこもり気味だからなのでしょうか？

## 十二話 歩く

昨日は食料散策中に、木の実を大量に手に入る場所と、この前血を洗い流した池を発見した。思わず声をあげて喜んでしまったのだが、まあ仕方ないことだろう。だって暫くの間の食料と水源を確保したのだ。これを喜ばずしていられるか。とまあ食料源を得た俺は、木の実を数十個ほど取って持ち帰った。そして木の実を置いて、今度は瓶を持って再び家を出た。そして瓶を抱えて池に向かった。正直かなり重かったのだが、これよりも小さいのが無いので、諦めて汗だくになりながら持って帰った。ちなみに木の実は甘酸っぱくて実に美味しかった。そしてその日は疲れたので直ぐに寝た。

そして次の日

俺は夜が明けて間もない、寒さの残る朝方に出掛ける準備をしていた。早すぎるのではと思うが、目的の場所はそれなりに遠い場所にあるらしいので、早いに越したことはない。

「よし、行くか」

準備といっても持っている物がもたら少ないので、俺は家の中から発見した麻袋を腰につけ、木の実を数個入れ、竹で作られた水筒に水を入れる程度で終了する。

「鍵……なんてかける必要ないよな。あ、そもそもねえや」俺はそんな下らないコントのようなことをしたあと戸を閉める

「んー、いい朝だな」

俺は大きく伸びをひとつする。そして軽くストレッチしてから、目的の場所に向かい歩き始める

「ここから博麗神社までってどんぐらいあるんだろ？」

俺はいつものように鎖をズルズル引き摺りながら、朝露が滴る草木の中を歩いていった。

博麗神社　慧音さんから聞いた話によると、東の端の端に位置して、幻想郷と外の世界を隔離する、博麗大結界の基点となっている非常に重要な場所らしい。そしてそこにはその結界の基点を守る博麗の巫女という人がいて、結界の守護の他にも幻想郷の異変解決や妖怪退治、外来人を外の世界に帰したりなどをしているらしい。……博麗巫女凄くね？

「博麗の巫女つてどんななんなんだろ？妖怪退治とかするんだからめっちゃゴツい人とか？」

俺は長身で彫りの深い筋骨隆々の女性？が巫女服を着ている姿を想像し　うぷっ

………博麗神社行くの止めようかな

俺は出発して早々、早くも挫けそうになった。

「はあ、ここまで来たら行くしかねえよなあ」

俺は肩をがっくり落としながらため息をつく。

静かな森に響いていた鎖の音の間隔が、少し長くなったのは気にしないであれ

## 十二話 歩く（後書き）

今話出てきた将のイメージの巫女さんは、あくまで彼のイメージです。某楽園の巫女さんとは何の関係もありません

十三話 辿り着く(前書き)

どうもです。

今回は他のよりも、少し長めな気がしなくてもないような気がしないです

### 十三話 辿り着く

博麗神社の道中、四五体の妖怪に出会った。もちろん殆ど逃げた。

全力で逃げた。なりふり構わず逃げた。だってミステリアみたいな人型の妖怪ならまだしも、妖怪っぽい妖怪が出たら真っ向から向かっていく気になんねえよ。まあ一回だけ会ったシヨボイ妖怪は、靈力で脚力を強化し回し蹴りで撃退した。その時に、強化した脚力で振るわれる鎖は、意外と破壊力があるということが判明した

「にしてもこんなところに参拝客来るのかよ」

俺はけもの道を踏みしめながらぼやく。俺はこんな行き難い場所に、なんで神社があるのか疑問に思った。

「お！これか？」

俺は少し開けた場所に出た。そこには長い長い石階段があった。

……なにこれいじめ？

人里から、妖怪の出るけもの道を半日歩かせておいて、最後にこんな長い階段を上がらせるなんていじめ以外のなんでもない。少なくとも俺はそう思う

「……………上るか」

俺は盛大に溜め息をついてから、階段に足をかけた。一段一段ゆっくりとあがつていくが、それでも割としんどい。

「ふう。やっと着いた」

俺は石階段を登りきると、息を一つついてから伸びをする。そして、上を見上げ博麗と書かれた鳥居に安心した。

さて……………とうとう、博麗の巫女と会わなきゃいけないのか……

俺は意を決して視線を神社のほうに移すと、神社の本殿の戸の前にひとりの少女が腰かけていた。大きな赤いリボンに腋の露出した巫女服を纏っているので、おそらく博麗の巫女だろう。

あれ？意外と普通だぞ？いや、もしかしたらこの子は普通の巫女で、



博麗の巫女は別にいるのかもしれない

「あんたが博麗の巫女か？」

俺は恐る恐るその巫女に話かける

「ええそうよ」

その巫女は俺の質問に肯定した。つまり彼女が正真正銘の博麗の巫女ということだ

「よかった……………本当に普通だった」

俺は胸をなでおろし、緊張が一気に解けた

「普通って……………あんたどんなのを想像していたのよ」

博麗の巫女は半眼で俺を見る。

「いやー、妖怪退治とかしてるって聞いたから、もっとガタイの良  
いマツチヨな感じを想像していたんだが、予想を反して可愛い巫女  
さんで吃驚だ」

「煽ても何も出ないわよ」

「煽てたつもりはないんだがな……………」

まあいいや。それよりも

俺は神社の前まで歩いて行き、懐に手をつ込んで小さな袋を取り  
出す。そしてその中からある物を取り出し、それを

チャリーン

入れた。賽銭箱に。俺は細かい作法とかは知らないので、そのまま  
手を合わせて目を瞑る

ガタンッ

が、何か近くでぶつかる音がしたので、目を開く

「……………なにしてんの？」

そこには賽銭箱に抱きつきながら中を覗き込む博麗の巫女がいた。

正直、目が怖い

「お賽銭箱の中見てるの。それよりもあんた良いやつね。名前は？」

「灰然将だ」

ん？これ、この名前になってから初名乗りじゃね？

「私は博麗霊夢。よろしくね」

博麗の巫女　もとい博麗霊夢は年相応の可愛い笑顔を浮かべて、非常に嬉しそうだ。

「……………なんとというか……………大変なんだな、この子

「お茶でも出すわ」

霊夢は立ち上がりお茶の準備をしに行ってくれた。

「いやー、緊張して損したな」

俺は腹いせに、頭の中でマツチヨな巫女をボコボコにする。しかし、途中から反撃を喰らって俺がボコボコにされた。

妄想ですら勝てないなんて……………

「はい、お茶。それでこの神社にどんな用事かしら？」

俺が勝手に絶望していると、湯のみと急須を持ってきて、茶を入れてくれる霊夢。

「ああ、ここにいることが多いって聞いたんだが」

俺は霊夢から湯飲みを受け取る

さて、大勝負といきますか

「八雲紫っていう妖怪に会いに来たんだが、いるか？」

十三話 辿り着く(後書き)

次回、VSゆかりんです。

## 十四話 戦う(前書き)

どうもです。

更新が少し遅くなってしまいました。正直出来も微妙な感じですが、  
本当に申し訳ありません

## 十四話 戦う

「八雲紫っていう妖怪に会いに来たんだが、いるか？」

これが、俺がここに来た理由だ。険しいけもの道を進み、妖怪たちの襲撃を退け、おつかないと思っていた博麗の巫女にもめげずここまで来たのは、その理由が俺にとってそれだけ価値があるのだ。

「呼んだかしら？」

返答は俺の真後ろから聞こえた。いきなりだった。気配も匂いも無かったのに突然そこに現れたのだ。俺は振り返る事は出来なかった。そもそも動くことすらできなかった。俺は八雲紫という妖怪に声だけで恐怖したのだ。

成程。流石大妖怪様ってところか…… 　　ってあれ？これって？

「私に何か用？」

「あつああ、あんたに聞きたいことが二つある」

俺は八雲に言いながら、思考を巡らす

「あら、随分なもの言いね」

後ろからくすくす笑う声がある。俺は必死に体の震えを抑えた

「悪いな。俺はこれしか教わらなかったんだ」

ビビんな俺。冷静になれ。

「なら仕方ないわね。それで私から何を聞きたいのかしら？」

妖艶さを含んだ八雲の声が俺の耳元です。それが俺の思考を邪魔するが、無視して要件を伝える

「まず一つ目は、俺をなぜ幻想郷こゝろに連れてきた？」

なるべく低く威圧するような声で俺は話す

「貴方は妖怪。幻想入りしてもおかしくないでしょ？私が連れてくるまでも無いわ」

八雲は答える気はないようだが、俺は簡単に引き下がらねえぞ

「俺は人間だ」

「いいえ、貴方は妖怪よ」

「見た目はともかくとして、俺は妖力じゃなくて霊力を持っている」

「ええ、知っているわ」

「なら「いいえ、貴方は妖怪」……どういうことだ？」

八雲は俺の言葉に否定の言葉をかぶせる。その声には確かなる自信を感じ取れた

「霊力を持っているのが人間、妖力を持っているのが妖怪だとするなら、妖力を持った人間は人間と言えるかしら？はたまた、霊力を持った妖怪は妖怪と言えるのかしら？」

八雲は俺の問いには答えず、逆に問いかけてくる。

「さあな？俺はまだ来たばかりだから、妖怪とかに関してそんな分からねえよ」

「それもそうよね。それで貴方の質問の答えなんだけど、私が言っているのは霊力とか妖力とかではなくて、貴方の本質の話。確かに貴方は人間よ。だけど本質は違う」

俺の本質……ねえ

俺は八雲の言葉を頭の中で反芻する。そして思考する

「俺の本質が妖怪だって言うのか？」

「ええ、そう。だからこの幻想郷に呼びこまれたのよ」

「俺の本質を調べたのも、その『境界を操る程度の能力』ってことか？」

「ええ」

「いつ調べたんだ？」

「貴方が幻想郷に来てからよ。霊力の高い人間が迷い込んで来たと思っただけで見たら、見た目が妖怪に興味を持ってね。それで調べてみたのよ」

成程。……さて、この辺かな？

「成程。嘘を吐く（・・・・）ってことは何か知られたくないことがあるんだな？」

「……どういうことかしら？」

八雲は先程と変わらない口調で返す。

「言葉通りだ。今のあなたの弁は嘘だ」

しかし、俺はさっきよりも少し強い口調で追及する。

「なにか根拠でもあるのかしら？」

「ああ。理由は二つある。一つ目はこの鎖」

俺は後ろにいる八雲に見えるように、片腕をあげる。腕についた分厚い枷から伸びる鎖がジャラジャラ鳴る。

「聞いた話によると、博麗大結界というのは、あなたが作った常識と常識で隔てられた境界で、ここで言う外の世界で常識となった、忘れられた存在が幻想郷に流れ着くように出来ているらしいな」  
「ええそうよ」

「ここに来るのは外で非常識となった、又は忘れられた存在が流れ着く。だが、そうなるこの鎖はおかしい。この鎖と枷は外の世界の特殊な金属で出来ていて、現代科学の粋を集めて造られている。つまり非常識でもなく、忘れられるような存在ではない」

「それは貴方の一部として認められたからじゃないの？」

「そうかも知れないが、だったら鎖が途中で切れてるのはおかしくないか？」

「……………」

八雲は俺の言葉で黙る。

「そして二つ目だ。俺はとある理由で普通の人よりも鼻が利いてな。まあその理由は面倒だが省くが、ここに来る前、つまり独房にぶち込まれていた時に、一回だけその人間じゃない者の匂いを嗅いだんだ」

「……………」

「あの時は気のせいかと思っていたから直ぐに忘れたけど、どうや

ら珍しい匂いはなかなか記憶から消えないらしくてな。今思い出したよ。俺の後ろからするあんたの匂いがあの時嗅いだ匂いと同じだったからな」

「……………」  
なにも答えない。

「態々あんなところまで来るって事は、俺のことを知ってたんだろ？それで俺をここに呼びこんだ」

「私があそこに行ったのは別の用事。貴方のところに行ったのは本当に偶々よ」

八雲はそう切り返す。さて、種も撒いたことだし勝負といきますか  
「そうか、偶々か。なら、幻想郷こゝろに来る時に微かに嗅いだ匂いが、今俺の後ろからするのも偶々か？」

「っ！！」

八雲が息を呑む音が聞こえた。

「どうだ？まだ続けるか？」

俺の勝ち……………かな？

「……………どうやら誤魔化すのはもう限界みたいね」

八雲は溜め息をひとつ吐くのが聞こえた。俺はゆっくりと振り代えると、そこには紫色のドレスを着て、日傘を持った綺麗な女性が立っていた。

「残念だったな」

俺は実に楽しそうな笑顔を八雲に向けた



## 十四話 戦う（後書き）

シヨウ、ゆかりんを論破する。

正直、出来にあまり納得していないのですが、私の文章力ではここまでが限界です

十五話 結ぶ（前書き）

どうもです。

残暑とかリア充と共に爆発すればいいと思います。ホントに、暑い  
中で暑い場面とか勘弁してください

## 十五話 結ぶ

「終わった？」

神社の縁側に座り、お茶を飲みながら静観していた霊夢が声をかける

「ええ」

「そう」

二人は短く言葉を交わす。霊夢はずっとお茶を啜る

「八雲」

「分かっているわ。貴方をここに連れてきた理由でしょ」

八雲は神社の方に歩きだす。そして縁側に座る。俺はその場に立つたまま、ずっと目を閉じて自分を戻す

あんま長くやっていると気持ち悪くなるんだよね。これ

「その前に貴方は、自分のことをどれだけ知っているのかしら？」  
目を開けて八雲の質問を吟味する

俺のこと……ねえ

「俺の中での俺の認識は半分人間の半分別物ってところだな。その別物がなんなのかも、どうしてそんな風になっているのかも、正直よく分からないが」

まあこれは俺に対しての俺の認識であって、私に対しての私の認識ではない。と、本来付け足す部分を敢えて省く。

「そう。じゃあ灰色　いや、賢獣と言った方が分かりやすいかしら」

八雲の言葉を聞いた俺は呆気にとられた

「流石妖怪の賢者ってところか？」

「貴方の周りのことは少し調べさせてもらったからね」

「成程、態々御苦勞な事だ」

俺は呑気に茶を啜っている八雲に皮肉気味に返す

「ねえ紫。さっき言ってた賢獣ってなんなの？」

八雲の隣に座っている霊夢が茶を啜りながら訊ねる。正直、大して

気になっているように見えないのは、さつきから暇だったため、なんとなく聞いてみただけだからだろう。

「将の住んでいた場所に祀られている三柱いる内の一柱よ」

「賢獣、剛天、和森の三柱の神がいて、賢獣は知恵と困惑を象徴する神だ」

八雲の説明に俺が補足を加える。

「ふーん。それでその神が将と何の関係があるの？」

あ、霊夢に質問盗られた

「さつき彼は、自分の半分は自分以外の別物が占めていると言ってたわよね」

「まさか……」

「そう。その彼の半分以上を占めている存在こそが賢獣よ」

「どうやら俺の半分は神らしい。なんか頭の良い便利な奴だとは思っていたけど、まさか神様とはね。びっくりだよ。ホントに……」

「ってなあ！？どういうことだよ！」

「さつきの言葉通りよ。貴方の半分は賢獣という神でできているの」

「早苗と同じ現人神ってこと？」

早苗って誰？ってか幻想郷って現人神までいるのかよ！？

「ちよつと違うわね。彼女の場合は直接血の繋がりの人間。つまり彼女自身が信仰の対象になって、彼女自身が神力を行使できる。」

でも将は半分は普通の人間だから、いくら信仰されようと貴方は神力は行使できず、その力は全部もう半分の神のほうに流れるわ」

「へえ、そんな風になつてんだ」

結局、俺の頭じゃ半分ぐらいしか理解できなかったのだが、何となく強がって分かった振りをする

「ふふつ、反応が多彩で面白いわね。灰色狼さん」

「灰色狼？なんだそれ？」

俺は軽く首を傾げる

まあ確かに耳や尻尾は灰色だが、これって狼なのか？

「賢獣の別の呼び名よ。まあ貴方の住んでいたところ以外では、こ

「つちでしか通じなかつたけれどね」

「そうなのか？俺はその灰色狼は初めて聞いたぞ」

「貴方のところでは使われていなかったからね。それと結構話が逸れてしまったけど、そろそろ本題に戻すわね」

「ああ……そうだな」

正直、結構ショッキングな事聞いたせいで、心の整理のためにもう少し待つてほしいという気持ちもあるが、時間を使えば使うほど人里まで安全に帰れる確率が減ってしまうのでそのまま話しに入る  
「幻想郷は人間と妖怪の共生のためのバランスが保たれて成り立っているの。この勢力のバランスが崩れると幻想郷は崩壊するわ」  
慧音さんから共生のことは聞いたが、崩壊するなんて初耳だ

「…おつかねえな」

「それで今のバランスは人間側に少し傾いてるの」

「それってヤバイんじゃない？」

「ええ、だから外の世界から強力な妖怪を呼び込むつもりなの」

「成程、それで調整すると」

「そう。そこで貴方の出番なのだけど、貴方にはそれらの妖怪との交渉をしてほしいの」

「交渉？」

「外の世界で消えずに残っているほど強力な妖怪が、すんなりとこちらの要求を受け入れるわけないでしょ」

「まあそうだな」

「……これ結構ヤバくないか？」

「だから貴方にはこちらの要求が通って、尚且つ向こうも不満のない交渉してほしいの」

「んな都合良くいくわけねえだろ！大体、敵陣に戦闘力皆無の俺が行ったら、死ぬかもしれないねえじゃねえかよ！！」

「大丈夫よ。危なくなったら私の能力で逃がしてあげるから」

八雲が扇子を当てながらクスクス笑う。実に腹立たしい

「はあ……ってかそんな交渉あんたがやればいいだろ？」

「あら？私は貴方に負けたのよ？」

「お遊びの勝敗なんて関係ねえよ」

「あら、バシてたの？」

「やっぱりか」

俺は八雲の反応を見てため息をつく

「……鎌かけたわね」

「騙される方が悪い」

半眼で睨む八雲に、俺は手をヒラヒラ振りながら悪びれた様子もなく返す

「まあ住むところを提供してもらってたんだ。しっかり逃がしてくれ  
るなら、そんぐらいやってやるよ」

「あら、ホントに？」

「ああ、綺麗な女性の頼みは聞くもんだって教えられててな」

俺は仕返しとして、笑いながらそう切り返す

「口説かれてるのかしら？」

だが、然して効果がなかったようだ

「さてね。それじゃあ用事も済んだことだし、そろそろ帰ってもいい  
いか？」

「ええ、構わないわ。用が出来たらこちらから呼ぶわ」

「分かった。じゃあな八雲に博麗。暇が出来たらまた参拝に来るよ」

「ええ、いつでも待ってるわ」

俺はそういって大妖怪と博麗の巫女のいる神社を後にした

「案外友好的になれたし、保険もかけられたから、なかなか良い結果  
になったな」

俺は長い石階段を下りながら一人呟く。空に浮かぶ太陽が俺の背中  
を焼く。そのことに気づいた俺は少し下るペースを上げた。

「間に合うか？」

再び俺は一人呟く

## 十五話 結ぶ（後書き）

ここまでの件は、主人公の設定を出すためだったのですが、結局全部出ないで終わってしまいました。

アレエ〜？

とまあ、次回から日常生活を書きたいと思います。学校があるので投稿に遅れが出ると思いますが、すいませんご了承ください

十六話 再会する（前書き）

どうもです。

地震雲がどこのどこの騒がれていましたが、結局のところどうなの  
でしょう？ー一応東海地方在住のため少し怖いです



## 十六話 再会する

博麗神社で八雲と話をつけてから二日過ぎていた。あのあと、なんとか夜になる前に家に辿り着くことができたのはいいが、家に入ったら様子を見に来てくれただろう慧音さんがいて、そのまま説教された。最初は意味が分からなかったが、話を聞く限りどうやら神社に向かう途中に見られていたらしい。そのため妖怪の多くいる森に一人で入ったこと、帰りが遅いことなどを重点的に攻められた。まあ説教は10分程で終了して、そのあと慧音さんと夕食を食べた。そして慧音さんが帰ったところで俺は力尽き一日を終了した

そして二日後

「んー」

俺は腕を組んで唸っていた。昨日からずっとこの調子で一日中唸っている

「やっぱり能力を有効に使うべきだよな。折角あるんだし。でも何に使うかなんだよな」

俺は昨日からずっと悩んでいた。俺がこれから生活していくなかで非常な重要なことを。それは

「ってか入れ換えが役に立つ仕事ってあんのか？」

仕事、職、金である。今俺は絶賛無職中だ。食べ物はまだ一応木の实があるが、一年中成っているわけがない。それに服だってこれしかないし、足りないものもたくさんある。

「何割か代わって相談所　は駄目か。論破するのはまた訳が違うだろうし」

んーどうしようか。……あ、そういえばまだ人里入れないじゃん人里内でバイトするなり、店を開くなり想像していたのが一気に水の泡となった

「はあ、いい働き口ねえかな」

俺は誰に言うわけでもなく、一人ぼやきながらごろりと寝転がる  
ドンドンッ

このまま寝てしまおうと、惰性化した俺の脳が語りかけ、危うく意識を手放してしまいそうになったところで、玄関の戸を叩く音が聞こえた。

「ん？慧音さんか？」

俺は少しだるい体を起こし、一応礼儀として服の乱れを整えてから玄関口に向かう。

「どちらさんつすか？」

俺はそう訪ねながらも戸を開く

「あ、やっぱりそうだった」そこには少し懐かしい顔の少女が、無邪気な笑顔で立っていた。最初に会ったときと同じ、炭と甘い匂いがする

「よ、ミスティア。久しぶりだな」

俺は玄関口に立っているミスティア・ローレイに軽く手をあげて返す

## 十六話 再会する（後書き）

非常に短くなってしまいました。

次回は長めな感じを想像しているのですが、どうなるかはまだ不明です。

## 十七話 飛ぶ（前書き）

どうもです。

少しずつですがやっと涼しい陽気になってきましたね。もう嬉しすぎて夏用の薄い布団を壁に思いつき叩きつけてしまいました。そのせいで、掛けてあったジグソーパズルたちが壊滅状態になったので、激しく後悔しました。

私のパズルたちが……

## 十七話 飛ぶ

六日振りぐらいに再会したミスティアを、俺はとりあえず家にあげた  
「それにしてもよく分かったな」

あー、茶ぐらい煎れられるようになりてえな

俺はそんな無い物ねだりを心の中でしつつ、奥の部屋から木の実を  
ザルに入れていくつか持つてくる

「人里の外れに人間みたいな妖怪が住み始めたって噂を聞いてね。  
もしかしたらと思つて来てみたの。あ、ありがと」

「人間みたいな妖怪つて……。俺一応人間だぞ。そこは百歩譲つて  
妖怪みたいな人間だろ」

「結局人間つてことになつたの？」

ミスティアは笑いながら聞く

「ああ、しかも八雲のお墨付きだ」

「八雲つてあのスキマ妖怪!? あんなのと繋がりがあるなんて一体  
何者よ!？」

先程の笑みは八雲の名前を出した瞬間、消え去つた。代わりに驚愕  
の色が顔に強く出た

やっぱり大妖怪様々つてか

「何者……か。聞いた話によると、半分人間で半分神で本質が妖  
怪らしい」

「なにそれ？」

「んー、俺にもよく分からねえ」

俺は木の実を一つ取り口に入れる。それにつられるようにしてミス  
ティアも木の実に手を伸ばす

「あー、茶が欲しいなあ」

「人里で買つてくれれば? まあ見た目はともかく人間なんでしょ?」

「まあそうなんだが……な」

俺はバツが悪そうに頬を掻く

「ん？どうしたの？」

「ミスティアは首を傾げる」

「いやー、なんか最近人里の人間が妖怪に襲われたらしく、こんな見た目だから警戒されててな。人里内で職ついで稼ごうと思ってたのに全部水の泡だよ」

「あー成程ね」

「はあ、どっかに良い働き口ないもんかね」

俺は溜め息を一つつきながら木の実をかじる

「……ねえ、仕事探してるのよね？」

「ん？ああ。なんか良いとこ知ってるのか？」

俺はミスティアに期待の眼差しを送る

「ええ。すごく良い所よ」

それに応えるようにミスティアは満面の笑みを浮かべる。

「そこ紹介してくれないか？」

「いいわよ。今から行く？」

「ああ、早いに越したことはないな」

俺は立ち上がり身支度を始める。

いやーよかったよかった。このまま無職だったら、本当に困るからな

「よし、準備完了だ。すまん、待たせたなミスティア」

「まあそんな待ってないけどね。じゃあ行きましょ」

ミスティアと俺は外に出る。そしてミスティアが俺の手を掴む。

「へ？」

「しっかり掴まってね。落ちたら痛いから」

「どうい つー！」

俺は言い切ることができなかった。まあこれは仕方ないだろ。だって

「飛んでる！？」

いきなり飛んだら誰だってこうなるだろ。



十七話 飛ぶ（後書き）

将のバイトのお話でした。

この話を書いててふと思ったんですが、魔理沙とかの店って稼げてるんですかね？



## 十八話 就職する（前書き）

どうもです。

台風十五号の猛威は凄まじいですね。家が吹き飛んでしまいそうで非常に怖いです。あと、十五号とか十六号と違って、某漫画の人造人間を思い出しますよね？

## 十八話 就職する

突然空中飛行を体験させられた俺は、その状況を楽しんでいた

訳が無い。

楽しめるか！こんなの！

俺は着くはずもない足をただバタつかせていた。

「ちよつと！あんまり動かないですよ！」

「お前無茶言っな！とりあえず一回降ろせ！」

「あともう少しで着くから我慢して！」

俺はミステリアの手にぶら下がりながら喚く

「せめてもう少し違う持ち方してくれ！これはマジで怖い！」

「じゃあどんな持ち方がいいのよ」

「おんぶでも抱っこでもなんでもいいから、とにかく安定した持ち方にしてくれ！」

もう俺にはプライドというものは存在していなかった。俺はとにかくこの状態を改善してほしかった。

「っ！ちよつと待って！それは私が嫌よ！」

しかし、ミステリアは拒否。

「頼むよミステリア！」

「おんぶとか抱っこって言ったら体が……その……く、くっついて……」

「おいミステリア！お願いだから揺らさないでくれ！なんか悪いこと言っただなら謝るからさ！」

さっきまで真っ直ぐ飛んでいたミステリアが、突然蛇行飛行を開始し始めた。そのため、ぶら下がっている俺は振り子のように何度も左右に揺られた。ミステリアがなんか言っていたような気がしたが、今の俺はそれどころじゃない

「そんなの……恥ずかし……」

「ミステリアああ！」

幻想郷の昼空に俺の叫びが響いた

結局、地獄の蛇行飛行は目的地付近まで続き、再び地面に足をつけた時にはグロッキー状態になっていた。

「……………ごめんなさい」

「ああ……………大丈夫……………夫だ」

心配そうに俺の顔を覗き込むミスティアに、息絶え絶えになりながらもなんとか返す。

「ホント？」

「すうー……………はぁ……………。ああ、もう平気だ」

俺は大きく深呼吸をひとつして笑顔を作る

「ホントにごめんなさい。あんなことしちゃって」

「気にすんなって、俺もなんか変なこと言ったみたいだし、お相手つてことで」

「うん、わかった」

「よし。そこでここが目的地か？」

俺はミスティアに訊ねる

「うん。あれよ」

ミスティアが前方　俺の背後を指差して言う。俺は振りかえってその指差した方向を見た。

「屋台？」

そこには木で作られた屋台が、甘い匂いを漂わせながら鎮座していた。

「そう。焼き八目鰻の屋台よ。最近何かと客が多くて一人で回すの大変だったのよね」

ミスティアはぼやきながら溜め息をつく

「一人で回すって、この屋台の従業員ってミスティアだけなのか？」

「ええ。そうよ」

ミステイアは屋台の方に歩き出す。俺もそれに続いて後を追うが、地に足が着いていない感覚が抜けきっていなかったらしく、覚束ない足取りとなってしまうた

「……大丈夫？」

「ああ……平気だ」

ミステイアに心配されながらも、数メートルの道のりを完走した

「ふー。ここが俺のバイト先か」

「ええ、それで聞きたいんだけど、貴方料理は出来る？」

「米なら炊ける……と思う」

そう答えた瞬間、ミステイアが微妙な顔をした。

仕方ねえじゃねえかよ！料理なんざあやったこともねえんだぞ！

「んー、予想外ね。人並みなら大丈夫かなって思ってたんだけど……」

……

「面目ない……」

「んー、どうしようかしら。……あ、じゃあ、お客集めとか広報活動とかはどう？」

「客集めか……それならなんとかかなりそうだな。でも、そんなにいいのかわ？」

なんかスゲー楽しそうなんだが……

「うん、別に私は構わないわ。ただ、給料は貴方の働き次第で、多くもなるしゼロにもなるからよろしくね」

「ゼロ!？」

ちよつと待てどついうことだ!？

「うん。だってあなたがお客を集めないと人来ないんだもん。っていうことでよろしくね」

……他にもバイトを探す必要があるそうだ



## 十八話 就職する（後書き）

今回のフラグではありません。ただ恥ずかしくしているだけです

## 十九話 探りにいく(前書き)

どうもです。

何だか気づいたら地区の運動会に出る羽目になって、2000m走を走ったら筋肉痛で次の日動けなくなりました。運動は適度にしなきゃ駄目ですね

## 十九話 採りにいく

ミスティアのバイトを受けてから数日後。未だに客集めには成功しておらず、このままだと本当に給料ゼロになりそうだ

「はあ。今思えば、来たばかりで人脈が薄い俺に頼むことじゃねえよな？」

俺は居間で寝転がりながら木の実をかじる

人里には入れねえし、霊夢は金ないだろうし、八雲はどこいるかわかんねえし……手詰まりじゃね？

「他の食い物もほしいなあ」

はあと溜め息を一つついて、俺はこれからどうするかを考える片手間で、そんな願望を口にしてみる

んー、八雲からの依頼があれば金とか請求してみようかな。でも、いつ来るか分からねえから、安定した稼ぎのある仕事がほしいんだよなあ

「あ、筍取り行こう」

俺は直ぐ様起き上がり、準備を開始した。行動に関しては目先の障害よりも、片手間の願望を優先させるが、頭はちゃんとそっちに働かせているため問題はない

たしか迷いの竹林ってところだよな。位置はここから人里挟んで反対側って言ってたよな

「たしかどっかに籠があつたよな……」

さっきまでは無気力で半分死んでいるような俺だったが、今では完全に元気を取り戻した。

「お、あつたあつた」

俺は背に背負える籠を二つ発見した。手入れに関しては、この前の掃除の時に一応洗ってあるので多分問題ない。俺はその籠を一つ背負い、もう一つは部屋の真ん中に置いておく

「っしや！待ってるよ筍！」



俺はいつもの装備に加えて、籠を背負いながら家の戸を開けた

迷いの竹林。なだらかな坂がいくつもあり、それが平衡感覚を狂わせ、回りの竹は成長のスピードが速く目印にならないどころか、寧ろ逆に迷わせる。更に辺りにはうっすらと霧がかかっており、遠くが見通せないようになっていいる。正しく迷いの竹林という名前に相応しい場所だ。

「さあーで、筍はどこかなあ」

俺は竹林の中で鼻を最大限に利かせ、お目当ての筍を探す

「お、こつちか？」

俺は匂いのするほうへ、引き寄せられていくように歩き出す。こんなときに鼻が利くのはかなり助かる。もし根性で見つけようとしたら、録な結果にはならないだろう。

「この辺に……あ、あった！」

俺は匂いの近くの竹の根本を腰を低くして探していると、記念すべき初筍を発見した。俺は靈力の応用で 手に込めた靈力をできる限り鋭くして、手刀で筍を刈り取る

「よっしゃ！この調子で……？」

俺は意気揚々と、次の筍に向かうために辺りの匂いを探っていると、すぐ近くに獣の匂いがした。

「後ろか？」

俺は逃げる体勢を作ってから、ゆっくり振り替えてみる。俺の視界には、さっきまで見ていた景色と大して変わらない景色が移った。唯一違う点と言ったら、竹の陰からこちら見ているあの獣だけだろう。

「兎？」

真っ白な体を竹に一生懸命隠し、真っ赤な瞳でこつちを見ている

「……………」

俺はじつと見返す。

「……………」

ぴよん

そして跳ねてみた。

ぴよん

それにつられるように兎も跳ねる

ぴよんぴよん

今度は二回跳ねてみた

ぴよんぴよん

同じように兎も二回跳ねる

ぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよんぴよんぴよん

ぴよんぴよんぴよんぴよんぴよん

跳ねている内に兎が段々近づいてきている気がする。そして知らぬ間に跳ねてる兎の数が増えている。

「何匹いるんだ？」

さつきまで見えていた土色の地面はもう見えず、真っ白なもこもこ  
が起伏を繰り返す光景に変わっていた。俺が跳ねるのを止めても兎  
たちはぴよんぴよん跳ね続けている

「さて、どうしようかな」

俺は足元に群がる兎たちを見て、頭を掻きながら溜め息をつく

## 十九話 探りにいく(後書き)

筒狩りにいくお話でした。

今思えば将の能力描写がかなり少ないことに気がつきました。  
次話辺りにだそうかなあ…

## 二十話 つかう(前書き)

どうもです。

ジグソーパズルの復元に成功してテンションがMAXです。まあMAXといっても限界値が低いものですから、見た目など大して変わりません。そのせいで、徹夜四歩手前ぐらいまで手伝ってもらった友達に「お前ホントに嬉しいの?」と、半ばキレ気味に言われました。

## 二十話 つかう

大量の兎の群れからやっとの思いで脱出した俺は、筈狩りを再開させようとした。しかし、どういうわけか分からないが、後ろからびよこびよこ兎達がついてくるのだ。正直気になって仕方がない

「…………どうしてこうなった？」

俺がなんかしたか？少なくとも筈とって跳ねただけじゃ、ここまでのことにはならんはずだ。

「…………まあいいや」

俺は思考することを破棄する。その代わりに、別のことに脳のスペースを割く

「こんなもんか？」

俺は次の筈に向かいながら、丸っこい石ころと角張っている石ころを拾う。

「よっと」

俺は丸っこい石を前方の霧に向かって投げる。そして石が霧の中に入った瞬間、俺は能力を発動させる

イメージだ。投げられたのが角張ったほうで、俺の手にあるのが…

「お、上手くいったな」

俺は手に握られている、先程投げたはずの丸っこい石ころを見る。

「発動までのタイムラグはあるが、まさか一発で上手くいくとは予想してなかったな」

能力の発動の仕方は何となく分かったけど、結構鮮明にイメージしないと駄目っばいな。まあ使ってくうちに慣れるだろうから別にいいか。

「疲労感も大してないし、次のステップに行くか」

俺は一旦その場に止まる。急に止まったせいかわ、先頭にいた兎が俺にぶつかるが、無視して再び丸っこい石ころを前に投げる。そして今度は、予め石のイメージを鮮明に頭に残した状態で能力を発動さ

せる。

「つつとつ」

俺が能力を使った二、三秒後、俺は地面よりも数メートル高い位置にいたが、すぐに重力に従い地面に着地した。

「……上手く行ったか？」

俺は確認のため後ろを見ると、先程まで大量にいた兎たちがいなくなっていた。どうやら上手くいったようだ。

まあとりあえず、使用と同時に発動できるようにしたいな

「変なところないよな」

次に俺は自分の体をチェックして、能力を発動させる前と変わらないことを確認する。

「うん、問題なし。ただちょっと疲れたかな？」

やはり自分を入れ換えるのは、物よりも疲労が大きいようだ。

まあ成功は成功か。じゃあ次は自分と生物の入れ換えだな

能力のテストに集中していたせいで、気づいたら筈の所まで来ていた。俺はなかなかの大きさのそれを手刀で狩りながら、次の課題を確定させる。

「む、奴等が来た」

俺の鼻がこちらに接近してくる匂いを捉えた。俺はどうすべきか考えたが、どうする必要もないという結論に行き着いた

「ん？違う匂い？」

奴等がもう視認できるぐらい接近した所で、今まで嗅いだことない匂いが入ってきた。

これは……炭と……

「ん？まさごほあっ！」

奴等が俺の腹やら何やらに、凄まじい勢いで突っ込んできた。

「つてて、一体なんだってんだよ」

俺は一番ダメージを受けた腹を擦りながら兎たちを見る。なにやらぴよこぴよこ飛び跳ねている。兎の気持ちなど知るはずもない俺は、それがどういいう意味合いを持つのか、はたまた何の意味も持たない

のか知る由もない。

「ん？どうした？」

さつきまで群がっていた兎たちが、一目散に俺から離れていった。腹に突撃するだけしたら逃げていく兎たちの行動が理解できない。

「っ！ヤバイぞこりゃ！」

俺は嗅覚や聴覚に比べて、妖力や霊力を感じとれる範囲が極端に狭い。並の妖怪の射程圏内に入ったところで、やっと感じ取れるくらいだ。はつきり言ってまるで役に立たない

「真っ直ぐこっちに向かってやがるな」

どうするか。前みたいに攻撃を受ける対象を入れ換えるか？いや、でも意識的に発動できるか分からないのを使うのは危険だしな。能力で飛ぶのは……無理か。視界が狭いここじゃ先に体力が切れちまうし……あ

「家まで飛べばいいじゃん」

俺は家の近くのものを思い出そうとするが、なかなか出てこない。

「ヤバイぞ！なんかないか！」

大きな妖力がどんどん近づいてくる。しかし、鮮明に思い付くものが見つからない。

ガサガサッ！

竹林の間から現れたのは恐らく植物の妖怪だろう。大きさは軽く三メートルを越えるぐらいあり、全体的に緑の体をしている。だらりと下がった大木のごとき両腕は、言葉通りの意味で俺を一捻りしてしまうだろう

「あ！籠！」

俺はいざというときのために、逃げる体勢を作りながら声をあげる。

っ！

その声に刺激されたらしく、その妖怪がよくわからない雄叫びをあげながらこっちに突っ込んできた。

イメージ完了。

「換われ！」

俺は叫びながら迫り来る妖怪を見る。タイムラグは二、三秒もある。しかし

「間に合わねえか!？」

目の前にはすでに腕を振りかぶった妖怪がいる。今から対象を変えても中途半端に終わるだろうし、この距離じゃ回避も無理だ  
畜生！さっさと発動しろよ！

俺は心の中で悪態つきながら、霊力で強化した腕で守りに入る

「伏せる！」

っ！

突然かかった声と共に、俺の目の前は紅色に塗り潰された。さっきの妖怪も、近くにあった竹も、すべてが紅く染まっていた。俺の顔に荒々しくも何処か優しげな、不思議な熱気がかかる。

「……………」

俺はこの空間を作り出した、紅い世界の中央に佇む姿を見た瞬間、景色がかわった。先程までの紅い世界は無く、もう見慣れた我が家の壁が視界を埋める

「火の鳥……………」

俺は戻る前に確かに見た。燃えるような真っ赤な羽を広げた大きな火の鳥の姿を。

「あ……………」

この距離を一気に飛んだ反動から強烈な眠気が俺を襲った。

バタッ

それに抗うことも出来ず、俺はそのまま眠りに入った



二十話 つかう(後書き)

遅くなって申し訳ありません

宣言通り能力の描写を入れてみたのですが、全然上手くいきませんでしたw w

いや〜難しいですね

二十一話 料理する(前書き)

どうもです。

最近やっと寒くなってきましたね。嬉しい限りです

## 二十一話 料理する

俺はあのまま眠り続け、起きたときには辺りはもう真っ暗だった。確か昼前ぐらいに行っただから、七、八時間は寝てたということになる。

「……腹減ったな」

俺は籠を下ろして中を見る。

「……二個」

かなり疲労した上に死にかけて、筍二個とか割りに合わねえよ

俺は盛大に溜め息をつきつつも二つの筍を手にとり、瓶に貯めた水で洗い皮を剥く。そして皮を剥いて洗い終わった筍を、靈力で切れ味を加えた手刀で切りはじめる。「あー調味料とかなんにもねえじゃん」

特に何も考えていなかった俺は、今頃筍と木の実と水だけで料理に挑もうとしていたことに気付いた

「まあいいか」

んー、試しに木の実を搾ったエキスで煮てみるか。

俺は切り終わった筍を鍋の中に入れ、一旦放置。そして袋にまとめである木の実を数十個取り出す。そしてそれを別の布にくるんで搾る。布から赤色が染み出てくる果汁を器で拾う

「あ、そっぴやあの火の鳥なんだっただら？今度あったら礼を言わないとな」

器の中に溜まる赤い果汁を見てふと思ひ出す

「そっぴや伏せろって声が聞こえたけど、あれって誰だったんだろ？あの鳥の声か？いや、鳥は喋らねえよ。ん、でもミスティアは鳥だけ喋るじゃん」

果汁を搾りながらぶつぶつ独り言を溢す

「あー、そろそろ人里入れるようになったかな？」

明日にでも人里に行ってみようかなあ

そんなことを考えていると果汁を搾り終わったので、搾りカスを捨て手を洗う。そしてそれを筍の入った鍋の中に入れる

「……………最初からこっちに搾ればよかった」

二度手間になっていることにやっと気付いた俺。なんか切なくなってきた

「まあ気をとり直して、あとは火にかけるだけだ」

俺の夕飯はもう目前だ

なんだ案外料理出来るじゃん俺

「さて、火は……………」

俺は灰すら無い囲炉裏を見る。

「……………ない」

食事に関しては木の実をそのままかじっていただけな上に、幻想郷に来た次の日以降は暖かい日が続いていたので、薪の存在など完全に抜け落ちていた。

「畜生おお！」

その日の夕食は生の筍と木の実と果汁ジュースという献立になった。

二十一話 料理する（後書き）

かなり短くてすみません

今回は前回の補足みたいな感じですよ

二十二話 求める(前書き)

どうもです。

大分間が空いてしまい申し訳ありません。そして長さはいつもと同じです

## 二十二話 求める

筈狩り失敗の次の日、俺はいつもよりも四割増しぐらいでだらけていた。傷こそ無かったが、死にかける思いをして結果二個。そしてその二個も、火がないというアクシデントに見舞われ、あえなくおじゃん。

結局昨日、兎と戯れ死にかけたただだったんじゃん

「はあ……どうすつかなあ」

俺は寝転がりながら吐き出すように呟く。

「人里に行くか、リベンジとしてまた筈狩りに……って先に火か」  
一掴みの灰すらない囲炉裏を横目で見る。

「……人里にマッチとか売ってねえかな？」

人里に行つて火種と仕事を探して、帰りに薪拾ってくる……これいいんじゃないね

「よし、そうと決まれば早速行動　と行きたいが、もうちょい寝転がってからにしよう」

いつもよりも四割増しでだらけている俺であった

結局家を出たのは、方針が決まってから数十分後だった。まああの状態から数十分で動けただけでも十分称賛に値するだろう。

「まずは第一関門、門番のおっさんだ」

俺は木の陰からこっそり様子を伺う。俺の視線の先には、最近でもないけどそんな凄まじい前ってわけではないぐらい前にみたおっさんがいる。手には槍を装備し、キラキラと周りを警戒しているその姿は実に強そうに見える

前はここでリタイヤだったが、今回はちゃんと耳も隠してるし、尻尾も仕舞ってる。……よし今度こそは！

俺は意を決して木の陰から飛び出す。

スタツスタツ

「……………おい」

「……………はい」

ヤバイ、バレたか!?

おっさんが此方を見てくる。俺は俯きながら冷や汗をダラダラかき、絞り出すように返事をする。

「あまり森の方には近づくなよ。」

「あ、はい、ありがとうございます」

おっさんは俺から視線を外し、前を向き直る。

よかったああ！バレずに潜入成功だぜ！

「とりあえず……………どこに何があるかわかんねえから慧音さんの家に行こ」

俺はうる覚えの道を進み始める。

「あ、あんた！昨日の!」

ん？何かどっかで聞いた声だな

俺は声のするほうを見る。そこには御札が大量に張られた真紅のモンペをつけた、白髪の女性が立っていた。

「おおっ！あんたは!」

「全く昨日は「誰だ?」あんな え?」

ちよつと知ってる振りしてみたのだが、なんか駄目な方向に転がりそうだったのでさっさと戻す

「すまんが全く見覚えがない」

「……………まああんた直ぐにどっか行っちゃったしね」

どうやら会ったことがあるらしいので、彼女の言ったことを元に記憶を辿る

直ぐにどっか行っちゃった?……………聞くところによると会ったのは昨日。つーことは導きだされる答えは



「あ、兎か！」

「違うわ！」

白髪の女性は俺が導き出した答えを、間髪入れずに否定する。  
「ありや？違ったのか？幻想郷なら兎も化けると思ったのに……やっ  
ぱ兎は兎なのか？」

「昨日あんたが竹林で」

「妹紅と将じゃないか。こんなところで何してるんだ？」

「あ、慧音さん」

「……慧音か」

俺と妹紅と呼ばれた女性は声のほうを向く。

「二人が知り合いだっただとは気づかなかったな」

「知り合い以前に今初めて会ったんだが……」

「いや、初めてじゃない。昨日竹林で会ってる」

「ありや？昨日竹林で？昨日会ったやつて言つと兎と化け物妖怪と……」

……あ

「あんたあの時の火の鳥か！」

俺は彼女のほうをバツと振り向いて言つと、「やつと思ひ出したか  
とでも言いたげな顔でため息をつかれた。

「全く、竹林の奥に霊力と妖力を感じて急いで来たと思つたら、い  
るのはどっちとも妖怪だし、片方はなんか直ぐに消えちゃったし」

「いやーすまん。礼も言わずに飛んじまって。それと俺は妖怪じゃ  
なくて人間　でもなかつたんだつた」

「は？」

「えーと、あー……半神半人っていうのか？まあそんなもん」

俺は前に聞いた単語を絞り出すように引つ張り出してきて、それつ  
ぽく加工してみた。なんか二人ともよく分かっていない御様子。

説明すんの面倒だな……

俺はため息をつきながら、この前の博麗神社でのことを踏まえて説  
明を始めた

二十二話 求める（後書き）

今回は単独での人里潜入でした。ていうか、前は慧音に招かれたから潜入ではないか（――；）

）  
次回はなんと！アレがこうなってソレがそうなります！お楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9028v/>

---

東方互換録

2011年11月2日21時10分発行